

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 23 号 (平成 31 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXIII, 2019

インド仏教最後期へと至る法体系の系譜
—解説の構成に注目して—

横 山 剛

インド仏教最後期へと至る法体系の系譜 — 解説の構成に注目して —

横山 剛

はじめに

仏教の原点であるインドにおいて大きな勢力を誇った説一切有部 (Sarvāstivāda) の教理は、大乘仏教が興隆した後も、その教理を支える基礎として重視された。その中でも有部の教理において原理論に相当する諸法の体系はとりわけ重要な位置を占め、インド仏教の最後期にまで伝えられた。

筆者はこれまで、インド仏教最後期のテキストが伝える有部の法体系として、アバヤーカラグプタ (Abhayākara Gupta, 11-12 世紀頃、一説には 1125 年没) の『牟尼意趣莊嚴』 (*Munimatālamkāra*) の第一章に説かれる法体系、ならびにダシャバラシュリーミトラ (Daśabalaśrīmitra, 1100-1170 年頃) の『有為無為決択』 (*Saṃskṛtāsamskṛtaviniścaya*) の第九章に説かれる法体系の研究に取り組んできた¹。その結果、『牟尼意趣莊嚴』に説かれる法体系については、チャンドラキールティ (Candrakīrti, 600-650 年頃) の『中観五蘊論』 (*Madhyamakapañcaskandhaka*) を典拠としており²、『有為無為決択』に説かれる法体系については、『牟尼意趣莊嚴』に説かれる法体系を典拠としていることが明らかとなった³。

さらに『中観五蘊論』の思想的な背景の一つとして、スカンディラ (*Skandhila, 塞建陀羅, 4-5 世紀頃) の『入阿毘達磨論』 (*Abhidharmāva-*

¹ ダシャバラシュリーミトラの年代については、van der Kuyp [Forthcoming] を参照。

² 『牟尼意趣莊嚴』と『中観五蘊論』の関係については、拙稿 [2014] 参照。

³ 『有為無為決択』第九章と『牟尼意趣莊嚴』の関係については、拙稿 [2018c] を参照。

tāra) が想定されることが先行研究によって指摘されている⁴。これと筆者が明らかにした上述の系譜を総合して考えるならば、インド仏教最後期へと至る法体系の系譜として、『入阿毘達磨論』→『中観五蘊論』→『牟尼意趣莊嚴』→『有為無為決択』という流れを指摘することができる。インド仏教最後期へと至る法体系が中観派の論書が紹介する有部の説を経由しているという事実は、大乘仏教が栄えていた当時の状況を伝えるものである。

さて、諸論書に説かれる法体系を比較し、その系譜を考察する場合には、諸法の並びが議論の中心になる傾向がある。しかし、法体系の系譜を明らかにするためには、解説の構成や解説の内容（諸法の定義など）という点からも比較が必要であり、多角的な分析が求められる。本稿では、上述の系譜における解説の構成を比較してみたい。『入阿毘達磨論』と『中観五蘊論』における解説の構成については、拙稿 [2018b] において論全体にわたって比較と検討を行った。したがって、本稿では『中観五蘊論』『牟尼意趣莊嚴』『有為無為決択』の三論書の構成を法体系の解説全体にわたって比較することでその系譜の細部を検討する。また、解説の構成という点から系譜を見た場合に確認される傾向や特徴的な点について指摘したい。なお、構成の比較結果については、巻末に資料として示す。

1. 『中観五蘊論』と『牟尼意趣莊嚴』における構成の比較

まずは『中観五蘊論』と『牟尼意趣莊嚴』における解説の構成を比較してみよう。両論における解説の構成の異同については、拙稿 [2014] において両論の関係を論じる中で部分的に扱い、相違点については簡略化と増補という二つの方向から特徴的な点を指摘した。本稿では、法体系の解説全体を視野に入れて、先の論文においては、紙幅の都合上、扱うことができなかった点を指摘する。また先の論文で指摘した点についても、情報を補足したい。

⁴ 瓜生津 [1965] [1978]、ならびに池田 [1985] 参照。

1.1. 『牟尼意趣莊嚴』に見られる簡略化

『中観五蘊論』と『牟尼意趣莊嚴』における法体系の解説を比較した場合、解説は基本的には簡略化の方向に向かっている。『牟尼意趣莊嚴』に見られる簡略化は、主に定義の省略と補足的な解説の省略に大別することができる。

はじめに定義の省略の典型的な例としては、智の解説が挙げられる。『中観五蘊論』は十智を列挙してその総説を行った後に、それぞれの智の定義を述べる。一方、『牟尼意趣莊嚴』は『中観五蘊論』に説かれる十智に修智 (parijaya-jñāna) と如説智 (yathāruta-jñāna) を加えた十二智を列挙するとどまり、それぞれの智の定義を述べない⁵。

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』
3.4.2.39. 智	2.5.2.40. 智
3.4.2.39.1. 智の総説 D 264a3-4, P 302b5-6.	33.15-16; D 135a5-6, P 162a1-2.
3.4.2.39.2. 法智 D 264a4-6, P 302b6-8.	_____
3.4.2.39.3. 類智 D 264a6-b1, P 302b8-303a3.	_____
3.4.2.39.4. 他心智 D 264b1-3, P 303a3-5.	_____
3.4.2.39.5. 世俗智 D 264b3, P 303a5.	_____
3.4.2.39.6. 苦智 D 264b3-4, P 303a5-7.	_____
3.4.2.39.7. 集智 D 264b4-5, P 303a7-8.	_____
3.4.2.39.8. 滅智 D 264b5-6, P 303a8-b1.	_____
3.4.2.39.9. 道智 D 264b6-7, P 303b1-2.	_____

⁵ 『牟尼意趣莊嚴』では、十二智それぞれの定義については、第三章 (D 194a4-b2, P 251b8-252a7) において示される。

3.4.2.39.10. 尽智 D 264b7-265a1, P 303b2-3.	
3.4.2.39.11. 無生智 D 265a1-3, P 303b3-6.	

定義の省略は、上述の智以外にも、纏における掉挙や悪作、心不相応行における依得、事得、処得においても見られる⁶。

次に補足的な解説の省略としては、拙稿 [2014] で指摘した慧と随眠の解説が代表的な例である。慧の解説については、『中観五蘊論』では論全体の約五分の一の分量を割いて中観派の思想を色濃く反映した解説がなされるが、『牟尼意趣莊嚴』では慧の定義のみが簡潔に示される。随眠の解説においては、三界ないし四向四果の詳説が省略される。ただし『牟尼意趣莊嚴』においてこれらの教理の解説が全くなされないというわけではない。三界については第一章の法体系の解説の直前で詳説され⁷、五部、九十八随眠、四向四結については第二章で詳説される⁸。このために諸法に關係する最低限の内容が第一章における法体系の解説で説かれたと考えられる。

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』
3.4.2.29. 随眠	2.5.2.31. 随眠
3.4.2.29.1. 随眠の総説 D 259a4-6, P 297a7-b1.	2.5.2.31.1. 随眠の総説 28.4-7; D 133a2-4, P 158b5-7.
3.4.2.29.2. 三界 D 259a6-b6, P 297b2-298a2.	
3.4.2.29.3. 五部	

⁶ 卷末の資料における下記の箇所を参照。掉挙：『牟尼意趣莊嚴』「——」，『中観五蘊論』「3.4.2.31.4. 掉挙」。悪作：『牟尼意趣莊嚴』「——」，『中観五蘊論』「3.4.2.31.5. 悪作」。依得など：『牟尼意趣莊嚴』「——」，『中観五蘊論』「3.4.3.7. 依得、事得、処得」。

⁷ MMA, D 118a5-127a1, P 136b3-149a8.

⁸ MMA, D 155a3-157a4, P 194a1-197a4.

D 259b6-260a2, P 298a2-5.	_____
3.4.2.29.4. 九十八随眠	_____
D 260a2-261a1, P 298a5-299a5.	_____
3.4.2.29.5. 四向四果	_____
D 261a1-5, P 299a5-b2.	_____
3.4.2.29.6. 随眠の語義解釈	2.5.2.31.2. 随眠の語義解釈
D 261a5-6, P 299b3.	28.9-11; D 133a4-5, P 158b7-159a1.
3.4.2.29.7. 随眠が生じる順番	2.5.2.31.3. 随眠が生じる順番
D 261a6-b4, P 299b4-300a2.	28.13-29.2; D 133a5-b1, P 159a2-7.
3.4.2.29.8. 随眠が生じる原因	2.5.2.31.4. 随眠が生じる原因
D 261b4, P 300a2-3.	29.4-7; D 133b1-3, P 159a7-b1.

このように『中観五蘊論』から『牟尼意趣莊嚴』へと至る過程では、解説は基本的には簡略化の方向に向かう。一方、それとは逆に情報が補足されている点も確認される。以下では『牟尼意趣莊嚴』における解説の増補について見てみよう。

1.2. 『牟尼意趣莊嚴』に見られる増補

『牟尼意趣莊嚴』において解説が補足されている点として、拙稿 [2014] では蓋と心不相応行の解説を紹介した。本稿では諸法に関する分類的な解説（諸門分別）について指摘したい。『中観五蘊論』は、蘊処界の解説を終えた後の結語において、諸法に関する詳細な分析については、同論以外を参照すべきであると述べる⁹。この一節は、裏を返せば、同論において

⁹ MPSk, D 266b5, P 305b2-3: phuñ po dañ /¹) skye mched dañ / khams rnam kyī²) mdoṛ bsduṣ pa ni bśad zin to // rgyas par dbye ba ni chos mñon pa dañ bsres pa las śes bar bya'o // ¹) om. P ²) gyi D 以上の一節における chos mñon pa dañ bsres pa が何を意味しているかは未だ明らかでない。何らかの論書を指しているのか、あるいは「アビダルマとの混合」と読むべきかなど様々な可能性が考えられるが、KRAH [2006] p. 193, 脚注 278 は、『雑阿毘曇心論』の原題の可能性の一つに

は諸法に関する詳細な分類や議論は行わないと述べていると理解できる。『俱舍論』『界品』や『五蘊論』などにみられる、蘊処界を説き終えた後に十八界を用いた有見無見などの分類的な解説を行う伝統を考慮すれば、『中観五蘊論』の結語における一節は十八界による分類的な解説を意図していると考えられる。この省略は解説を有部の法体系の要点に絞り込もうとする同論の性格によるものであると考えられる¹⁰。一方、『牟尼意趣莊嚴』は十八界を説き終えた後に「欲界繫、色界繫、無色界繫、不繫」をはじめとする十八界を用いた分類的な解説を行う。

『中観五蘊論』

『牟尼意趣莊嚴』

5. 十八界による諸門分別
- 5.1. 欲界繫、色界繫、無色界繫、不繫
40.1-4; D 137b3-4, P 165a8-b3.
- 5.2. 善、不善、無記
40.5-8; D 137b4-6, P 165b3-6.
- 5.3. 内、外
40.9-10; D 137b6-7, P 165b6-7.
- 5.4. 有所縁、無所縁
40.10-11; D 137b7, P 165b7.

以上の『牟尼意趣莊嚴』が説く十八界にもとづく分類的な解説は、先に述べた法体系の解説の伝統に沿うものである。

**Mīśrakābhīdharmahrdayasāstra* が挙げられること、そして *bsres pa* の原語として *mīśraka* を想定することができるという二点から、*chos mñon pa dañ bsres pa* が『雑阿毘曇心論』を指す可能性を指摘する。本論文の趣旨から外れるためにここではこの問題にはこれ以上踏み込まないが、『中観五蘊論』と『雑阿毘曇心論』の関係については、今後の検討が求められる。

¹⁰『中観五蘊論』における分類的な解説の省略については、拙稿 [2014] pp. 25-26、ならびに拙稿 [2018b] pp. 23-24 も併せて参照。

2. 『牟尼意趣莊嚴』と『有為無為決択』における構成の比較

さて、ここからは『牟尼意趣莊嚴』と『有為無為決択』における解説の構成を、同じく簡略化と増補という二つの方向から、比較してみよう。

2.1. 『有為無為決択』に見られる簡略化

『中観五蘊論』から『牟尼意趣莊嚴』に至る過程と同様に『牟尼意趣莊嚴』から『有為無為決択』に至る過程においても、解説が簡略化されている点が随所に確認される。その中で特に目を引くのは、定義の省略である。例えば、行蘊の心相応行の解説において、作意や欲などの法は心相応行の構成要素として列挙されるが、具体的な定義や解説が示されない。

『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
2.5.2.1. 心相応行の総説 20.2-8; D 129b4-7, P 153b1-6.	2.5.2.1. 心相応行の総説 D 141b4-7, P 44b8-45a5.
2.5.2.2. 思 20.10-12; D 129b7-130a1, P 153b6-8.	2.5.2.2. 思 D 141b7-142a1, P 45a5-6.
2.5.2.3. 触 20.14-21.5; D 130a1-4, P 153b8-154a5.	2.5.2.3. 触 D 142a1, P 45a6.
2.5.2.4. 作意 21.7-9; D 130a4-5, P 154a5-6.	_____
2.5.2.5. 欲 21.11-13; D 130a5-6, P 154a6-8.	_____
2.5.2.6. 勝解 21.15-17; D 130a6-7, P 154a8-b2.	_____

このような定義や解説の省略は、結、随煩惱、纏、智、心不相応行においても見られる¹¹。

¹¹ 巻末の資料における下記の箇所を参照。結：『有為無為決択』「2.5.2.11. 結」、『牟

『牟尼意趣莊嚴』から『有為無為決択』へと至る過程では、一見すると簡略化されている箇所が目には留まるが、解説が補足されている点も確認される。続いて『有為無為決択』における増補について見てみよう¹²。

2.2. 『牟尼意趣莊嚴』における増補

『有為無為決択』において解説が大きく補足されている点としては、心相応行に関する分類的な解説と十八界にもとづく分類的な解説を挙げることができる。『牟尼意趣莊嚴』では行蘊の末尾において心相応行中で断すべき法と修すべき法が分類されるが、『有為無為決択』では心相応行の末尾において上述の所断と所修の分類が説かれ、さらに、大地法などの心所法の下位分類と様々な種類の心において幾つの心所法が俱生するかが説かれる。

『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
→ 「2.5.4. 相応行中の所修と所断」	2.5.2.24. 心相応行（心所法）の諸分類 2.5.2.24.1. 所断と所修 D 146b1-5, P 50a7-b5.

牟尼意趣莊嚴」2.5.2.29. 結、随煩惱：『有為無為決択』2.5.2.14. 随煩惱、『牟尼意趣莊嚴』2.5.2.32. 随煩惱、纏：『有為無為決択』2.5.2.15. 纏、『牟尼意趣莊嚴』2.5.2.33. 纏、智：『有為無為決択』2.5.2.22. 智、『牟尼意趣莊嚴』2.5.2.40. 智、心不相応行：『有為無為決択』2.5.3. 心不相応行、『牟尼意趣莊嚴』2.5.3. 心不相応行、

¹²『中観五蘊論』から『牟尼意趣莊嚴』へと至る過程で解説が簡略化されていた箇所が『牟尼意趣莊嚴』から『有為無為決択』に至る過程で、どのように扱われているかという点についても確認しておきたい。慧の解説については、『有為無為決択』では『牟尼意趣莊嚴』よりも簡略化が進み、心相応行の構成要素として示されるだけで、その定義は述べられない。随眠の解説については、『牟尼意趣莊嚴』で省略された三界、五部、九十八随眠を『有為無為決択』は説く（ただし、三界については略説のみ）。しかし、四向四果については『牟尼意趣莊嚴』と同じく解説しない。そして、九十八随眠の詳説が総括された後に、修所断の随眠の諸分類が説かれる。智の解説については、『有為無為決択』は『牟尼意趣莊嚴』と同じく十二智を列挙するのみである。

_____	2.5.2.24.2. 大地法などの分類
_____	D 146b5-147a4, P 50b5-51a5.
_____	2.5.2.24.3. 様々な種類の心に俱生
_____	する心所法の数
_____	2.5.2.24.3.1. 心の分類
_____	D 147a4-b3, P 51a6-b6.
_____	2.5.2.24.3.2. 欲界繫の善心などと
_____	相応する法
_____	D 147b3-148a7, P 51b6-52b5.
_____	2.5.2.24.3.3. 色界繫ならびに無色
_____	界繫の善心などと相
_____	応する法
_____	D 148a7-b3, P 52b5-53a1.

十八界にもとづく分類的な解説については、先に述べたように『牟尼意趣莊嚴』は『中観五蘊論』には説かれない欲界繫ないし不繫などの分類を説くが、『有為無為決択』はそれに、四諦、三性、二諦の分類を追加する。

『牟尼意趣莊嚴』

5. 十八界による諸門分別
- 5.1. 欲界繫、色界繫、無色界繫、不繫
40.1-4; D 137b3-4, P 165a8-b3.
- 5.2. 善、不善、無記
40.5-8; D 137b4-6, P 165b3-6.
- 5.3. 内、外
40.9-10; D 137b6-7, P 165b6-7.
- 5.4. 有所縁、無所縁
40.10-11; D 137b7, P 165b7.
- _____
- _____
- _____
- _____
- _____

『有為無為決択』

5. 十八界による諸門分別
- 5.1. 欲界繫、色界繫、無色界繫、不繫
D 149a7-b2, P 54a1-4.
- 5.2. 善、不善、無記
D 149b2-4, P 54a4-7.
- 5.3. 内、外
D 149b4-6, P 54a7-b1.
- 5.4. 有所縁、無所縁
D 149b6, P 54b1-2.
- 5.5. 四諦
D 149b6-150a1, P 54b2-4.
- 5.6. 三性
D 150a1-2, P 54b4-5.
- 5.7. 二諦
D 150a2-3, P 54b5-6.

このように『有為無為決択』では分類的な解説に重きが置かれており、『牟尼意趣莊嚴』における補足にさらに情報が付け加えられる形になっている¹³。

おわりに

本稿では『中観五蘊論』から『牟尼意趣莊嚴』を經由して『有為無為決択』へと至る法体系の系譜に注目し、解説の構成を比較することで、上述の系譜の細部を検討した。

『中観五蘊論』から『牟尼意趣莊嚴』へと至る過程においては、主に定義の省略と補足的な解説の省略により解説は簡略化の方向に向かう。一方で『牟尼意趣莊嚴』では『中観五蘊論』が省略した十八界にもとづく分類的な解説（諸門分別）を補足している。『牟尼意趣莊嚴』から『有為無為決択』へと至る過程においては、定義の省略を中心に簡略化されている点が目立つ。しかし、ここでも心相応行と十八界に関する分類的な解説が補足されている。

このように『中観五蘊論』から『有為無為決択』へと至る法体系の系譜においては、解説は基本的に簡略化の方向に向かっている。しかし、それに反して解説が増補されている点としては、諸法の分類的な解説がある。

¹³『中観五蘊論』から『牟尼意趣莊嚴』へと至る過程で解説が増補されていた箇所が『牟尼意趣莊嚴』から『有為無為決択』に至る過程で、どのように扱われているかという点についても確認しておきたい。蓋の解説については、『牟尼意趣莊嚴』は『俱舎論』の「随眠品」に見られる解説を用いて補足を行うが、『有為無為決択』はこの補足を省略する。心不相応行の解説については、『牟尼意趣莊嚴』は『中観五蘊論』が説く十九心不相応行に『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccaya*)に説かれる心不相応行として、異生性、勢速、次第、時、方、数という六法を補足して、それらの法の定義を述べる。『有為無為決択』も十九心不相応行に『阿毘達磨集論』に説かれる心不相応行を補足するが、その際には、上述の六法に、さらに流転、定異、相応の三法を加えた九法を補う。そして、合計二十八の心不相応行を列挙するだけにとどまり、各法の定義は述べない。最後に十八界にもとづく分類的な解説については、本文中で述べたように、『中観五蘊論』では全く説かれないが、『有為無為決択』へと至る系譜の中で段階的に補足される。

特に十八界にもとづく分類的な解説については、『牟尼意趣莊嚴』と『有為無為決択』において段階的に増補されている。

本稿における比較結果と拙稿 [2018b] に示した『入阿毘達磨論』と『中観五蘊論』の構成の比較結果を総合すれば、『入阿毘達磨論』から『有為無為決択』へと至る系譜における法体系の変遷の詳細を知ることができる。今後の研究課題としては、そのような法体系の変遷の中から『中観五蘊論』以降の論書において心相応行中に説かれる解脱 (vimukti) に注目し、『中観五蘊論』における定義を起点としてその機能や心相応行法として説かれた理由を検討することを予定している。

略号一覧

AY-1	AKAHANE and YOKOYAMA [2014]
AY-2	AKAHANE and YOKOYAMA [2015]
BPT	BAUDDHAKOŚA PROJECT TEAM [2014]
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
L	LINDTNER [1979]
Li-1	李ほか [2015]
Li-2	李ほか [2016]
MMA	<i>Munimatālaṃkāra</i>
MPSk	<i>Madhyamakapañcaskandhaka</i>
M-1	宮崎ほか [2017]
M-2	宮崎ほか [2019]
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
SAV	<i>Saṃskṛtāsamskṛtaviniścaya</i>
Y _{201X}	拙稿 [201X]

参考文献

一次文献

Madhyamakapañcaskandhaka

(Tib.) D (3866) *ya* 239b1-266b7, P [99] (5267) *ya* 273b6-305b5.

(Tib. ed.) LINDTNER [1979].

Munimatālamkāra

(Skt.) Section of Sarvadharmā: 李・加納 [2015].

(Tib.) D (3903) *a* 73b1-293a7, P [101] (5299) *ha* 71b3-398b3.

(Tib. ed.) Section of Sarvadharmā: AKAHANE and YOKOYAMA [2014],
AKAHANE and YOKOYAMA [2015].

(Jpn.) Section of Sarvadharmā: 李ほか [2015][2016].

Saṃskṛtāsaṃskṛtaviniścaya

(Tib.) D (3897) *ha* 109a1-317a7, P [146] (5865) *ño* 5b1-270b3.

研究一覧

AKAHANE, RITSU and YOKOYAMA, Takeshi 赤羽律、横山剛

[2014] “The Sarvadharmā Section of the *Munimatālamkāra*, Critical Tibetan Text, Part I: With Special Reference to Candrakīrti’s *Madhyamakapañcaskandhaka*” 『インド学チベット学研究』 18, pp. 14-49.

[2015] “The Sarvadharmā Section of the *Munimatālamkāra*, Critical Tibetan Text, Part II: With Special Reference to Candrakīrti’s *Madhyamakapañcaskandhaka*” 『インド学チベット学研究』 19, pp. 97-137.

BAUDDHAKOŚA PROJECT TEAM バウツダコーシャ・プロジェクトチーム

[2014] 「śraddhā / saddhā の訳語をめぐって」, 『仏教文化研究論集』 17, pp. 3-64.

IKEDA, Rentarō 池田練太郎

[1985] 「Candrakīrti 『五蘊論』における諸問題」, 『駒澤大學佛教學部論集』 16, pp. 23-45.

KRAGH, Ulrich Timme

- [2006] *Early Buddhist Theories of Action and Result, a Study of Karmaphalasambandha, Candrakīrti's Prasannapadā, Verse 17.1-20*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien.

LI, Xuezhū and KANO, Kazuo 李学竹、加納和雄

- [2015] 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章—『中觀五蘊論』にもとづく一切法の解説（fol. 48r4-58v1）—」, 『密教文化』234, pp. 7-44.

LI, Xuezhū *et al.* 李学竹ほか

- [2015] 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』—一切法解説前半部—」, 『インド学チベット学研究』19, pp. 138-157.
- [2016] 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』—一切法解説後半部—」, 『インド学チベット学研究』20, pp. 53-75.

LINDTNER, Christian

- [1979] “Candrakīrti's Pañcaskandhaprakaraṇa, I. Tibetan Text,” *Acta Orientalia* XL, pp. 87-145.

MIYAZAKI, Izumi *et al.* 宮崎泉ほか

- [2017] 『『中觀五蘊論』における五位七十五法対応語』, バウツダコーシャ IV, 山喜房佛書林, 東京.
- [2019] 『『中觀五蘊論』の法体系：五位七十五法対応語を除く主要術語の分析』, バウツダコーシャ VII, 山喜房佛書林, 東京.

URYŪZU, Ryūshin 瓜生津隆真

- [1965] 「中觀仏教におけるボサツ道の展開—チャンドラキールティの中觀学説への一視点」, 『鈴木学術財団年報』1, pp. 63-77. (改訂版：「中觀仏教における菩薩道の展開—『入中論』を中心として—」, 『全訳チ

- ヤンドラキールティ 入中論』, 起心書房, 千葉, pp. 1-31)
- [1978] 「中観学派におけるアビダルマ一月称造『五蘊論』管見」, 『國譯一切經印度撰述部月報 三藏集』第三輯, 大東出版社, 東京, pp. 185-192. (初出: 『國譯一切經印度撰述部月報 三藏』116 (毘曇部第二十四卷), 大東出版社, 東京, 1976)

van der KUIJP, Leonard W. J.

- [Forthcoming] “A Brief Note on the Date of Daśabalaśrimitra and his *Samśkṛtāsamśkṛtaviniścaya*” (公開 URL: <http://harvard.academia.edu/LeonardvanderKuijp/Drafts>)

YOKOYAMA, Takeshi 横山剛

- [2014] 「『牟尼意趣莊嚴』(*Munimatālamkāra*)における一切法の解説— 月称造『中観五蘊論』との関連をめぐって—」, 『密教文化』233, pp. 51-77.
- [2015a] “A Reconstruction of the Sanskrit Title of Candrakīrti’s *Phuṅi po lña’i rab tu byed pa*. With Special Attention to the Term “*rab tu byed pa*”” 『印度學佛教學研究』63-3, pp. 208-212.
- [2015b] 「『中観五蘊論』における諸法解説の性格—無我説との関係をめぐって—」, 『密教文化』235, pp. 89-114.
- [2016a] “An Analysis of the Textual Purpose of the *Madhyamakapañca-skandhaka*. With a Focus on its Role as a Primer on Abhidharma Categories for Buddhist Beginners” 『印度學佛教學研究』64-3, pp. 164-168.
- [2016b] 「『中観五蘊論』の思想的背景について—『五蘊論』ならびに『入毘達磨論』との関係についての再考察—」, 『真宗文化』25, pp. 23-42.
- [2016c] 「『中観五蘊論』の著者について—月称部分著作説の再考察—」, 『密教文化』237, pp. 71-100.
- [2017a] “An Analysis of the Conditioned Forces Dissociated from Thought

- in the *Madhyamakapañcaskandhaka*”『印度學佛教學研究』65-3, pp. 177-182.
- [2017b] 「中観派における *prajñā* の定義的用例：『中観五蘊論』に基づく訳語の検討」, 『仏教文化研究論集』18・19 合併号, pp. 59-74.
- [2017c] 「『中観五蘊論』に説かれる有部説の帰属をめぐって」, 『密教文化』239, pp. 27-46.
- [2018a] “The Relationship between the *Madhyamakapañcaskandhaka* and the *Ratnāvalī*: With a Focus on the Parallel Passages in the Definitions of the Defiled Elements”『印度學佛教學研究』66-3, pp. 135-140.
- [2018b] 「論の構成からみた『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係—諸法の体系に付随して説かれる教理に注目して—」, 『国際仏教学大学院大学研究紀要』22, pp. 21-62.
- [2018c] 「ダシャバラシュリーミトラ著『有為無為決択』第九章が伝える有部の法体系—その内容と典拠をめぐって—」, 『密教文化』241, 印刷中.
- [2019] “Distinctions between Similar Elements in the *Madhyamakapañcaskandhaka*”『印度學佛教學研究』67-3, pp. 89-94.

資料 『中観五蘊論』『牟尼意趣莊嚴』『有為無為決択』における一切法解説の構成の比較

以下に提出するのは、左側に『中観五蘊論』の構成を、中央に『牟尼意趣莊嚴』（第一章における一切法の解説）の構成を、右側に『有為無為決択』（第九章）の構成を示して、三論書における法体系の解説の構成を対照させた一覧である。

一覧の各項目においてはその該当箇所を示した。『中観五蘊論』については、チベット語訳二版（デルゲ版、北京版）の該当箇所を、『牟尼意趣莊嚴』については、梵文テキスト（李・加納 [2015]）とチベット語訳二版（デルゲ版、北京版）の該当箇所を、『有為無為決択』については、チベット語訳二版（デルゲ版、北京版）の該当箇所を示した。

いずれかの論書に対応する解説がない場合には、それを「————」によって示した。対応する解説があるが説かれる場所が異なる場合には、参照すべき対象箇所を矢印付きで示した。当該箇所に関係する先行研究がある場合には、その情報を丸括弧付きで示した。

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
1. 序偈 D 239b1-2, P 273b7-8. (L 95.4-7, Y _{2015b} 90-91, Y _{2016a} 165)	1. 一切法解説の序文 12.10-11; D 127a1, P 149a7-8. (Li-1 144.20-22, AY-1 21.27-22.1)	1. 第九章の序文 D 140a5-6, P 43a6-7.
2. 五蘊、十二処、十八界の総説 D 239b2-6, P 273b8-274a5. (L 95.8-24)	————— ————— —————	————— ————— —————
3. 五蘊 → 「2. 五蘊、十二処、十八界の総説」	2. 五蘊 2.1. 五蘊の総説 12.13; D 127a1-2, P 149a8. (Li-1 144.23-24, AY-1 22.3-6)	2. 五蘊 2.1. 五蘊の総説 D 140a6-7, P 43a7-8.
3.1. 色蘊 3.1.1. 色蘊の総説	2.2. 色蘊 2.2.1. 色蘊の総説	2.2. 色蘊 2.2.1. 色蘊の総説

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 239b6-7, P 274a5-7. (L 95.25-3, M-2 2-7, 25-29)	12.15-13.2; D 127a2-3, P 149a8-b2. (Li-1 144.25-145.3, AY-1 22.8-12)	D 140a7, P 43a8-b1.
3.1.2. 大種 (L 96.4-97.6)	2.2.2. 大種 (Li-1 145.3-147.3, AY-1 22.14-25.11)	→ 「2.2.3.2.3. 大種と所造色」
3.1.2.1. 大種の総説 D 239b7-240a2, P 274a7-b1. (M-2 25-29)	2.2.2.1. 大種の総説 13.2-4; D 127a3, P 149b2-3.	
3.1.2.2. 大種と所造色の関係 D 240a2-3, P 274b1-3. (M-2 25-29)	2.2.2.2. 諸法の相互依存性 2.2.2.2.1. 大種と所造色の関係 13.4-10; D 127a3-5, P 149b3-6.	_____
→ 「3.4.2.10.3.3. 四大種と大種所造の実体性の否定」		_____
→ 「3.4.2.10.3.4. 極微の実体性の否定」	2.2.2.2.2. 極微の八事俱生 13.11-14.4; D 127a5-b2, P 149b7-150a5.	_____
→ 「3.4.2.10.3.5. 心と心所法の実体性の否定」	2.2.2.2.3. 心と心所の無自性性 14.4-8; D 127b2-4, P 150a5-8.	→ 「2.2.3.2.3. 大種と所造色」
3.1.2.3. 大種の自性と作用 D 240a3-5, P 274b3-6. (M-2 8-24)	2.2.2.3. 大種の自性と作用 14.10-13; D 127b4-5, P 150a8-b3.	_____
3.1.2.4. 大種の相互依存 D 240a5-7, P 274b6-8. (Y _{2016a} 166-167, M-2 2-7)	2.2.2.4. 大種の相互依存 14.14-18; D 127b5-7, P 150b3-6.	_____
3.1.2.5. 大種の語義、大種と虚空の違い D 240a7-b1, P 274b8-275a2. (M-2 2-7)	2.2.2.5. 大種と虚空の違い 15.1-2; D 127b7, P 150b6-7.	_____
3.1.3. 所造色	2.2.3. 所造色 (Li-1 147.4-148.10, AY-1 25.12-27.16)	_____
3.1.3.1. 五根 (L 97.7-98.23)	2.2.3.1. 五根	2.2.2. 五根 D 140a7-b1, P 43b1-2.

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
3.1.3.1.1. 眼根 D 240b1-241a2, P 275a2-b4. (M-1 2-7)	2.2.3.1.1. 眼根 15.5-6; D 127b7-128a1, P 150 b7-8.	
3.1.3.1.2. 眼根以外の四根 と男女根 D 241a2-4, P 275 b4-7. (M-1 8-19)	2.2.3.1.2. 眼根以外の四根 15.7-10; D 128a1-2, P 150b8- 151a1.	
3.1.3.1.3. 根の語義 D 241a4-6, P 275b7-276a2.	2.2.3.1.3. 根の語義 15.9-10; D 128a2, P 151a1-2.	_____
3.1.3.2. 五境 (L 98.24-100. 32)	2.2.3.2. 五境	2.2.3. 五境
3.1.3.2.1. 五境の総説 D 241a6-7, P 276a2-4.	_____	2.2.3.1. 五境の総説 D 140b1-2, P 43b2.
3.1.3.2.2. 色 D 241a7-b4, P 276a4-b1. (M -1 20-25)	2.2.3.2.1. 色 16.2-6; D 128a2-4, P 151a2-5.	2.2.3.2. 色 2.2.3.2.1. 色彩と形状 D 140b2-5, P 43b2-5.
_____	_____	2.2.3.2.2. 有見有対、無見 有対、無見無対 D 140b5- 6, P 43b5-8.
_____	_____	2.2.3.2.3. 大種と所造色 D 140b6-141a2, P 43b8-44a3.
→ 「3.1.2. 大種」	→ 「2.2.2. 大種」	2.2.3.3. 声 D 141a2-3, P 44a3-6.
3.1.3.2.3. 声 D 241b4-242a3, P 276b1-277 a1. (M-1 26-31)	2.2.3.2.2. 声 16.6-8; D 128a4, P 151a5-6.	2.2.3.4. 香 D 141a3-4, P 44a6.
3.1.3.2.4. 香 D 242a3-4, P 277a1-2. (M-1 32-35)	2.2.3.2.3. 香 16.8; D 128a4-5, P 151a6-7.	2.2.3.5. 味 D 141a4, P 44a6-7.
3.1.3.2.5. 味 D 242a4, P 277a2-3. (M-1 36 -38)	2.2.3.2.4. 味 16.8-9; D 128a5, P 151a7.	2.2.3.6. 所触 D 141a4-5, P 44a7-8.
3.1.3.2.6. 所触 D 242a4-b1, P 277a3-8. (M- 1 39-44)	2.2.3.2.5. 所触 16.9-15; D 128a5-7, P 151a7- b3.	_____
3.1.3.3. 五根五境と六識の 関係 D 242b1-3, P 277a8- b3.	2.2.3.3. 五根五境と六識の 関係 16.16-18; D 128a7-b1, P 151b3-5.	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
3.1.3.4. 無表 (L 100.33-102.17, M-1 45-55)	2.2.4. 無表 16.20; D 128b1-2, P 151b5. (Li-1 148.11-12, 156.8-157.7, AY-1 27.17-19, 41.6-42.7)	2.2.4. 無表色 D 141a5-6, P 44a8-b1.
3.1.3.4.1. 無表の定義 D 242b3-4, P 277b3-5.	2.2.4.1. 無表の定義 Cf. 40.17-41.2; D 78b4-5, P 78b5-6.	
3.1.3.4.2. 律儀、不律儀、非律儀非不律儀 D 242b4-243a2, P 277b5-278a3.	2.2.4.2. 律儀、不律儀、非律儀非不律儀 Cf. 41.2-3; D 78b5-6, P 78b6-7.	
3.1.3.4.3. 律儀などの獲得と放棄 D 243a2-7, P 278a3-b1.	2.2.4.3. 律儀などの獲得と放棄 Cf. 41.3-5; D 78b6-7, P 78b7-79a1.	————— ————— —————
3.1.3.4.4. 表と無表 D 243a7-b3, P 278b1-5.	2.2.4.4. 表と無表 Cf. 41.6-15; D 78b7-79a3, P 79a1-5.	————— ————— —————
————— ————— —————	2.2.5. 色の壊礙性 17.1-2; D 128b2, P 151b5-7. (Li-1 148.13-16, AY-1 27.20-28.1)	————— ————— —————
3.2. 受蘊 (L 102.18-104.10, M-1 62-73)	2.3. 受蘊 (Li-1 148.17-150.2, AY-1 28.2-30.2)	2.3. 受蘊 ————— —————
3.2.1. 受の定義 D 243b3, P 278b5-6.	2.3.1. 受の定義 17.6-7; D 128b2-3, P 151b7-8.	————— ————— —————
3.2.2. 心と心所の関係 D 243b3-244a1, P 278b6-279a4.	2.3.2. 心と心所の関係 17.9-15; D 138b3-6, P 151b8-152a5.	————— ————— —————
3.2.3. 二受 D 244a1-2, P 279a4-5.	2.3.3. 二受 18.1; D 128b6, P 152a5-6.	2.3.1. 二受、六受 D 141a6-7, P 44b1-3.
3.2.4. 三受 D 244a2-4, P 279a5-b1.	2.3.4. 三受 18.1-2; D 128b6-7, P 152a6-7.	2.3.2. 三受 D 141b1, P 44b3-4.
3.2.5. 五受 D 244a4-b2, P 279b1-7.	2.3.5. 五受 18.2-9; D 128b7-129a3, P 152	2.3.3. 五受 D 141b1-2, P 44b4-5.

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
3.2.6. 六受 D 244b2-3, P 279b7-8.	a7-b4. 2.3.6. 六受 18.9-10; D 129a3, P 152b4-5.	→ 「2.3.1. 二受、六受」
3.3. 想蘊 (L 104.11-105.9, M-1 74-81, Y 2019 90)	2.4. 想蘊 (Li-1 150.3-151.4, AY-1 30.3 -31.10)	2.4. 想蘊
3.3.1. 想の定義 D 244b3-5, P 279b8-280a4.	2.4.1. 想の定義 18.12-17; D 129a3-5, P 152b5 -8.	_____
3.3.2. 想と識の違い D 244b5-7, P 280a4-6.	_____	_____
3.3.3. 想と言語の関係 D 244b7-245a2, P 280a6-b1.	2.4.2. 想と言語の関係 18.18-19.8; D129a5-b1, P 152 b8-153a6.	_____
3.3.4. 六想 D 245a2-3, P 280b1-2.	2.4.3. 六想 19.9-10; D 129b1-2, P 153a6- 7.	2.4.1. 六想 D 141b2-3, P 44b5-7.
3.3.5. 三想 D 245a3, P 280b2.	_____	2.4.2. 三想 D 141b3, P 44b7-8.
3.4. 行蘊	2.5. 行蘊	2.5. 行蘊
3.4.1. 行蘊の総説		2.5.1. 行蘊の総説 D 141b3-4, P 44b8.
3.4.1.1. 心相応行と心不相 応行 D 245a3-6, P 280b2-6. 受と想を蘊として別立てす る理由を含む。	2.5.1. 受と想を蘊として別 立てする理由 19.13-16; D 129b2-4, P 153a7-b1. (Li-1 151.5-10, AY-1 31.12-32.1)	
3.4.1.2. 心相応行の総説 D 245a6-b2, P 280b6-281a2. (L 105.10-106.9)	2.5.2. 心相応行 2.5.2.1. 心相応行の総説 20.2-8; D 129b4-7, P 153b1- 6. (Li-1 11-19, AY-1 32.3- 15)	2.5.2. 心相応行 2.5.2.1. 心相応行の総説 D 141b4-7, P 44b8-45a5.
3.4.1.3. 心不相応行の総説 D 245b2-5, P 281a2-6.	→ 「2.5.3.1. 心不相応行の 総説」	→ 「2.5.3.1. 心不相応行の 総説」
3.4.2. 心相応行		
3.4.2.1. 思	2.5.2.2. 思	2.5.2.2. 思

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 245b5-7, P 281a6-b1. (L 106.12-20, M-1 82-85)	20.10-12; D 129b7-130a1, P 153b6-8. (Li-1 151.20-152.2, AY-1 32.16-33.3)	D 141b7-142a1, P 45a5-6.
3.4.2.2. 触 D 245b7-246a4, P 281b1-6. (L 106.21-107.4, M-1 91-95)	2.5.2.3. 触 20.14-21.5; D 130a1-4, P 153 b8-154a5. (Li-1 152.3-12, AY-1 33.4-16)	2.5.2.3. 触 D 142a1, P 45a6.
3.4.2.3. 作意 D 246a4-b4, P 281b6-282b1. (L 107.5-35, M-1 103-106, Y 2019 90)	2.5.2.4. 作意 21.7-9; D 130a4-5, P 154a5-6. (Li-1 152.13-17, AY-1 33.17-34.1)	作意ないし勝解については、心相応行の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.4. 欲 D 246b4-247a7, P 282b1-283 a7. (L 108.1-109.9, M-1 86-90, Y 2019 91)	2.5.2.5. 欲 21.11-13; D 130a5-6, P 154a6-8. (Li-1 152.18-22, AY-1 34.2-8)	_____
3.4.2.5. 勝解 D 247a7-b2, P 283a7-b1. (L 109.10-17, M-1 107-110, Y 2019 91)	2.5.2.6. 勝解 21.15-17; D 130a6-7, P 154a8-b2. (Li-1 152.23-27, AY-1 34.9-13)	_____
3.4.2.6. 信 D 247b2-7, P 283b1-8. (L 109.18-110.4, BPT 37-44, M-1 114-118)	2.5.2.7. 信 22.3-7; D 130a7-b1, P 154b2-5. (Li-1 152.28-153.4, AY-1 34.14-35.3)	2.5.2.4. 信 D 142a1-3, P 45a6-8.
3.4.2.7. 精進 D 247b7, P 283b8-284a1. (L 110.5-8, M-1 119-121)	2.5.2.8. 精進 22.7; D 130b1-2, P 154b5-6. (Li-1 153.5-6, AY-1 35.4-7)	精進ないし欣については、心相応行の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.8. 念 D 247b7-248a1, P 284a1. (L 110.9-10, M-1 100-102)	2.5.2.9. 念 22.7-9; D 130b2, P 154b6-7. (Li-1 153.7-9, AY-1 35.8-10)	_____
3.4.2.9. 定 D 248a1-2, P 284a1-2. (L 110.11-14, M-1 111-113)	2.5.2.10. 定 22.9; D 130b2, P 154b7. (Li-1 153.10-11, AY-1 35.11-13)	_____
3.4.2.10. 慧 (L 110.15-121.	2.5.2.11. 慧	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
10)	22.9-13; D 130b2-3, P 154b7-	_____
3.4.2.10.1. 慧の定義	155a1. (Li-1 153.12-16, AY-	_____
D 248a2-4, P 284a2-6. (Y	1 35.14-20, Y ₂₀₁₄ 29-31)	_____
2015b 93-95, Y _{2017b})	_____	_____
3.4.2.10.2. 人無我の論証	_____	_____
D 248a5-249b3, P 284a6-286	_____	_____
a3.	_____	_____
3.4.2.10.3. 法無我の論証	_____	_____
3.4.2.10.3.1. 法無私の定義	_____	_____
D 249b3-6, P 286a3-7. (Y	_____	_____
2015b 95-96)	_____	_____
3.4.2.10.3.2. 無為法の実体	_____	_____
性の否定 D 249b6-7, P 286	_____	_____
a7-8. (Y _{2015b} 96)	_____	_____
3.4.2.10.3.3. 四大種と大種	_____	_____
所造の実体性の否定 D	_____	_____
249b7-250b2, P 286a8-287a5.	_____	_____
(Y _{2015b} 97-100)	_____	_____
3.4.2.10.3.4. 極微の実体性	_____	_____
の否定 D 250b2-251a1, P	_____	_____
287a5-b6. (Y _{2015b} 100-102)	_____	_____
3.4.2.10.3.5. 心と心所法の	_____	_____
実体性の否定 D 251a1-3,	_____	_____
P 287b6-288a1. (Y _{2015b} 95-	_____	_____
103)	_____	_____
3.4.2.10.4. 無常性を認める	_____	_____
も事物の存在を主張する	_____	_____
異説 (唯識説)	_____	_____
3.4.2.10.4.1. 異説の内容	_____	_____
D 251a3-6, P 288a1-4. (Y	_____	_____
2016c 84-85)	_____	_____
3.4.2.10.4.2. 異説の教証	_____	_____
D 251a6-b3, P 288a4-b3. (Y	_____	_____
2016c 85-87)	_____	_____
3.4.2.10.4.3. 異説の理証	_____	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 251b3-4, P 288b3-4. (Y _{2016c} 87-88)	_____	_____
3.4.2.10.5. 異説に対する論駁 D 251b4-252a5, P 288b4-289a7.	_____	_____
3.4.2.10.6. 経典引用による論駁の敷衍 D 252a5-253b7, P 289a7-291a6.	_____	_____
3.4.2.10.7. 無我の解説の総括 D 253b7-254a5, P 291a6-b4.	_____	_____
3.4.2.11. 尋 D 254a5-b5, P 291b4-292a5. (L 121.11-122.7, M-1 210-213)	2.5.2.12. 尋 22.15-16; D 130b3-4, P 155a1-3. (Li-1 153.17-19, AY-1 35.21-36.3)	_____
3.4.2.12. 伺 D 254b5-255a1, P 292a5-b1. (L 122.8-20, M-1 214-216)	2.5.2.13. 伺 22.16-17; D 130b4, P 155a3. (Li-1 153.19-20, AY-1 36.4-6)	_____
3.4.2.13. 放逸 D 255a1, P 292b1. (L 122.21-23, M-1 154-156)	2.5.2.14. 放逸 22.19; D 130b4-5, P 155a3-4. (Li-1 153.21-22, AY-1 36.7-10)	_____
3.4.2.14. 不放逸 D 255a1-b1, P 292b1-293a2. (L 122.24-123.20, M-1 146-149)	2.5.2.15. 不放逸 22.19-23.1; D 130b5, P 155a4. (Li-1 153.21-22, AY-1 36.11-12)	_____
3.4.2.15. 厭 D 255b1-2, P 293a2-3. (L 123.21-24, M-2 30-33)	2.5.2.16. 厭 23.3-4; D 130b5, P 155a4-6. (Li-1 153.23-25, AY-1 36.13-19)	_____
3.4.2.16. 欣 D 255b2, P 293a3-4. (L 123.25-26, M-2 34-37)	2.5.2.17. 欣 23.6; D 130b5-6, P 155a6. (Li-1 153.26-154.1, AY-1 36.20-37.1)	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
3.4.2.17. 軽安、不軽安 ¹⁾ D 255b2-4, P 293a4-6. (L 123.27-33, M-1 143-145, M-2 38-39)	2.5.2.18. 軽安 23.8; D 130b6, P 155a7. (Li-1 154.2-3, AY-1 37.2-4)	2.5.2.5. 軽安 D 142a3, P 45a8.
3.4.2.18. 害 D 255b4, P 293a6-7. (L 124.1-3, Y 201 _{6b} 28-29, M-1 188-191)	2.5.2.19. 不軽安 23.8-9; D 130b6, P 155a7-8. (Li-1 154.3-4, AY-1 37.5-7)	2.5.2.6. 不軽安 D 142a3, P 45a8-b1.
3.4.2.19. 不害 D 255b4-5, P 293a7. (L 124.4-5, M-1 140-142)	2.5.2.20. 害 23.11; D 130b6-7, P 155a8. (Li-1 154.5-7, AY-1 37.8-10)	害ないし愧については、心相応行の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.20. 慚 D 255b5-6, P 293a7-b1. (L 124.6-12, M-1 126-128)	2.5.2.21. 不害 23.12; D 130b7, P 155a8. (Li-1 154.7, AY-1 37.11-12)	————— ————— ————— ————— ————— ————— ————— —————
3.4.2.21. 愧 D 255b6-7, P 293b1-2. (L 124.13-15, M-1 129-131)	2.5.2.22. 慚 23.14-15; D 130b7-131a1, P 155b1. (Li-1 154.8-11, AY-1 37.13-16)	————— ————— ————— ————— ————— ————— ————— —————
3.4.2.22. 捨 D 255b7-256a2, P 293b2-5. (L 124.16-23, M-1 122-125)	2.5.2.23. 愧 23.15; D 131a1, P 155b2. (Li-1 154.11, AY-1 37.17-19)	2.5.2.7. 捨 D 142a3-4, P 45b1-2.
3.4.2.23. 解脱 D 256a2-3, P 293b5-6. (L 124.24-27, M-1 29-30, M-2 40-42)	2.5.2.24. 捨 23.17-24.1; D 131a1-2, P 155b2-4. (Li-1 154.12-17, AY-1 37.20-38.5)	心相応行の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.24. 善根 D 256a3-5, P 293b6-294a1. (L 124.28-125.9, M-1 132-139, M-2 47-51)	2.5.2.25. 解脱 24.3-7; D 131a2-4, P 155b4-7. (Li-1 154.18-25, AY-1 38.6-15)	————— ————— ————— ————— ————— ————— ————— —————
3.4.2.25. 不善根 D 256a5-7, P 294a2-4. (L	2.5.2.26. 善根 24.9-13; D 131a4-6, P 155b7-156a2. (Li-1 154.24-155.2, AY-1 38.16-39.1)	2.5.2.8. 善根 D 142a4-5, P 45b2-3.
	2.5.2.27. 不善根 24.15-18; D 131a6-b1, P 156a	2.5.2.9. 不善根 D 142a5, P 45b3.

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
125.10-17, M-2 52-56)	2-5. (Li-1 155.3-7, AY-1 39.2-9)	
3.4.2.26. 無記根 D 256a7-b4, P 294a4-b1. (L 125.18-34, M-2 57-64)	2.5.2.28. 無記根 25.2-13; D 131b1-5, P 156a5-b6. (Li-1 155.8-23, AY-1 39.10-40.14)	2.5.2.10. 無記根 D 142a5-6, P 45b3-5.
3.4.2.27. 結 (L 126.1-130.15, M-2 65-69)	2.5.2.29. 結 (Li-2 59.11-62.19, AY-2 99.20-105.14)	2.5.2.11. 結
3.4.2.27.1. 結の総説 D 256b4-5, P 294b1-3.	2.5.2.29.1. 結の総説 25.15-16; D 131b5-6, P 156b6-7.	2.5.2.11.1. 結の総説 D 142a6-7, P 45b5-6.
3.4.2.27.2. 愛結 D 256b5-6, P 294b3-4. (M-2 70-73)	2.5.2.29.2. 愛結 25.17; D 131b6-7, P 156b7.	愛結ないし疑結については、結の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.27.3. 恚結 D 256b6-7, P 294b4. (M-1 219-221, Y ₂₀₁₉ 93)	2.5.2.29.3. 恚結 25.18; D 131b7, P 156b7-8.	_____
3.4.2.27.4. 慢結	2.5.2.29.4. 慢結	_____
3.4.2.27.4.1. 慢結の総説 D 256b7-257a2, P 294b4-8. (M-1 222-227, M-2 74-78)	2.5.2.29.4.1. 慢結の総説 25.19-21; D 131b7-132a1, P 156b8-157a2.	_____
3.4.2.27.4.2. 慢 D 257a2-5, P 294b8-295a3. (M-1 222-227, M-2 79-82)	2.5.2.29.4.2. 慢 25.22-26.1; D 132a1-2, P 157a2-3.	_____
3.4.2.27.4.3. 過慢 D 257a5-6, P 295a3-4. (M-2 83-86)	2.5.2.29.4.3. 過慢 26.2; D 132a2, P 157a3-4.	_____
3.4.2.27.4.4. 慢過慢 D 257a6-7, P 295a4-6. (M-2 87-89)	2.5.2.29.4.4. 慢過慢 26.3; D 132a2-3, P 157a4-5.	_____
3.4.2.27.4.5. 我慢 D 257a7-b3, P 295a6-b2. (M-2 90-94)	2.5.2.29.4.5. 我慢 26.4-9; D 132a3-5, P 157a5-b1.	_____
3.4.2.27.4.6. 増上慢	2.5.2.29.4.6. 増上慢	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 257b3-4, P 295b2-4. (M-2 95-98)	26.10-11; D 132a5-6, P 157b1-2.	_____
3.4.2.27.4.7. 邪慢 D 257b4-5, P 295b4-5. (M-2 99-102)	2.5.2.29.4.7. 邪慢 26.12-13; D 132a6, P 157b2-3.	_____
3.4.2.27.4.8. 卑慢 D 257b5-6, P 295b5-6. (M-2 103-106)	2.5.2.29.4.8. 卑慢 26.14-15; D 132a6-7, P 157b3-4.	_____
3.4.2.27.5. 無明結 D 257b6-7, P 295b6-8. (M-1 150-153)	2.5.2.29.5. 無明結 26.16-19; D 132a7-b1, P 157b4-6.	_____
→ 「3.4.2.27.8. 疑結」	2.5.2.29.6. 疑結 26.20-21; D 132b1, P 157b6-7.	_____
3.4.2.27.6. 見結	2.5.2.29.7. 見結	2.5.2.11.2. 見結
3.4.2.27.6.1. 見結の総説 D 257b7-258a1, P 295b8-296a1.	2.5.2.29.7.1. 見結の総説 26.22; D 132b1, P 157b7.	D 142a7-b1, P 45b6-7.
3.4.2.27.6.2. 有身見 D 258a1-6, P 296a1-7. (M-2 107-112)	2.5.2.29.7.2. 有身見 26.23-27.7; D 132b1-4, P 157b7-158a5.	有身見ないし邪見については、見結の要素としてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.27.6.3. 辺執見 D 258a6-b1, P 296a7-b1. (M-2 113-116)	2.5.2.29.7.3. 辺執見 27.8-10; D 132b4-6, P 158a5-7.	_____
3.4.2.27.6.4. 邪見 D 258b1-2, P 296b1-3. (M-2, 117-120)	2.5.2.29.7.4. 邪見 27.11-12; D 132b6, P 158a7-8.	_____
3.4.2.27.7. 取結	2.5.2.29.8. 取結	2.5.2.11.3. 取結
3.4.2.27.7.1. 取結の総説 D 258b2, P 296b3-4.	2.5.2.29.8.1. 取結の総説 27.13; D 132b6, P 158a8.	D 142b1, P 45b7.
3.4.2.27.7.2. 見取 D 258b2-5, P 296b4-7. (M-2, 121-124)	2.5.2.29.8.2. 見取 27.14-15; D 132b6-7, P 158a8-b1.	見取と戒禁取については、取結の要素としてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.27.7.3. 戒禁取	2.5.2.29.8.3. 戒禁取	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 258b5-7, P 296b7-297a2. (M-2 125-129)	27.16-18; D 132b7-133a1, P 158b1-3.	_____
3.4.2.27.8. 疑結 D 258b7-259a1, P 297a2-3. (M-1 228-231)	→ 「2.5.2.29.6. 疑結」	結の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.27.9. 嫉結 D 259a1-2, P 297a3-4. (M-1 181-184)	2.5.2.29.9. 嫉結 27.19; D 133a1, P 158b3.	嫉結と慳結については、結の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.27.10. 慳結 D 259a2-3, P 297a4-5. (M-1 178-180)	2.5.2.29.10. 慳結 27.20; D 133a2, P 158b3-4.	_____
_____	_____	2.5.2.11.4. 下分結、上分結 D 142b1-3, P 45b7-46a2.
_____	_____	2.5.2.11.5. 煩惱の働き D 142b3-5, P 46a2-4.
3.4.2.28. 縛 D 259a3-4, P 297a5-7. (L 130.16-20, M-2 130-133)	2.5.2.30. 縛 27.22-28.1; D 133a2, P 158b4-5. (Li-2 62.17-19, AY-2 105.14-16)	2.5.2.12. 縛 D 142b5-6, P 46a4-5.
3.4.2.29. 随眠 (L 130.20-135.6, M-2 134-149)	2.5.2.31. 随眠 (Li-2 62.20-64.2, AY-2 105.17-107.12, Y ₂₀₁₄ 31-33)	2.5.2.13. 随眠
3.4.2.29.1. 随眠の総説 D 259a4-6, P 297a7-b1.	2.5.2.31.1. 随眠の総説 28.4-7; D 133a2-4, P 158b5-7.	2.5.2.13.1. 随眠の総説 D 142b6-143a3, P 46a5-b2.
3.4.2.29.2. 三界	_____	2.5.2.13.2. 三界
3.4.2.29.2.1. 三界の総説 D 259a6-7, P 297b2.	_____	D 143a3-4, P 46b2-3. 三界を列挙して、各界に十随眠の幾つがあるかを略説するのみ。
3.4.2.29.2.2. 欲界 D 259a7-b2, P 297b2-5.	_____	_____
3.4.2.29.2.3. 色界 D 259b2-5, P 297b5-8.	_____	_____
3.4.2.29.2.4. 無色界 D 259b5-6, P 297b8-298a2.	_____	_____
3.4.2.29.3. 五部	_____	2.5.2.13.3. 五部

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 259b6-260a2, P 298a2-5.	_____	D 143a4-5, P 46b3-4.
3.4.2.29.4. 九十八随眠	_____	2.5.2.13.4. 九十八随眠
3.4.2.29.4.1. 見苦所断の二十八随眠 D 260a2-5, P 298a5-b1.	_____	2.5.2.13.4.1. 見苦所断の随眠 D 143a5-7, P 46b4-7.
3.4.2.29.4.2. 见集所断の十九随眠 D 260a5-b1, P 298b1-5.	_____	2.5.2.13.4.2. 见集所断の随眠 D 143a7-b1, P 46b7-47a1.
3.4.2.29.4.3. 见减所断の十九随眠 D 260b1-3, P 298b5-7.	_____	2.5.2.13.4.3. 见减所断の随眠 D 143b2, P 47a1-2.
3.4.2.29.4.4. 见道所断の二十二随眠 D 260b3-5, P 298b7-299a2.	_____	2.5.2.13.4.4. 见道所断の随眠 D 143b2-4, P 47a2-4.
3.4.2.29.4.5. 修所断の十随眠 D 260b5-261a1, P 299a2-5.	_____	2.5.2.13.4.5. 修所断の随眠 D 143b4-6, P 47a4-7.
_____	_____	2.5.2.13.4.6. 九十八随眠の
_____	_____	総括 D 143b6-144a1, P 47a
_____	_____	7-b2.
_____	_____	2.5.2.13.5. 修所断の随眠の
_____	_____	諸分類 D 144a1-b1, P 47b2
_____	_____	-48a2.
_____	_____	_____
3.4.2.29.5. 四向四果	_____	_____
D 261a1-5, P 299a5-b2.	_____	_____
3.4.2.29.6. 随眠の語義解釈	2.5.2.31.2. 随眠の語義解釈	_____
D 261a5-6, P 299b3.	28.9-11; D 133a4-5, P 158b7-	_____
_____	159a1.	_____
3.4.2.29.7. 随眠が生じる順	2.5.2.31.3. 随眠が生じる順	_____
番 D 261a6-b4, P 299b4-300	番 28.13-29.2; D 133a5-b1, P	_____
a2.	159a2-7.	_____
3.4.2.29.8. 随眠が生じる原	2.5.2.31.4. 随眠が生じる原	_____
因 D 261b4, P 300a2-3.	因 29.4-7; D 133b1-3, P 159	_____
_____	a7-b1.	_____
3.4.2.30. 随煩惱	2.5.2.32. 随煩惱	2.5.2.14. 随煩惱

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
(L 135.7-136.10, M-2 150-155)	(Li-2 64.3-65.9, AY-2 107.13-109.7)	D 144b1-3, P 48a2-4.
3.4.2.30.1. 随煩惱の総説 D 261b5-7, P 300a3-6.	2.5.2.32.1. 随煩惱の総説 29.9-10; D 133b3, P 159b1-3.	
3.4.2.30.2. 誑 D 261b7-262a1, P 300a6-7. (M-1 192-194)	2.5.2.32.2. 誑 29.11-13; D 133b3-4, P 159b3-4.	誑ないし諂は随煩惱の例としてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.30.3. 橋 D 262a1-2, P 300a7-8. (M-1 198-200)	2.5.2.32.3. 橋 29.14; D 133b4-5, P 159b4-5.	_____
3.4.2.30.4. 害 D 262a2, P 300a8. (Y 2016b 28-29, M-1 188-191)	2.5.2.32.4. 害 29.15; D 133b5, P 159b5.	_____
3.4.2.30.5. 悩 D 262a2-3, P 300a8-b1. (M-1 185-187)	2.5.2.32.5. 悩 29.16; D 133b5-6, P 159b5-6.	_____
3.4.2.30.6. 恨 D 262a3-4, P 300b1-2. (M-1 201-203)	2.5.2.32.6. 恨 29.17; D 133b6, P 159b6-7.	_____
3.4.2.30.7. 諂 D 262a4, P 300b2-4. (M-1 195-197)	2.5.2.32.7. 諂 29.18-30.1; D 133b6, P 159b7-8.	_____
3.4.2.30.8. 六随煩惱と随眠の関係 D 262a5, P 300b4-5.	2.5.2.32.8. 六随煩惱と随眠の関係 30.2-3; D 133b6-7, P 159b8-160a1.	_____
3.4.2.31. 纏 (L 136.11-137.26, M-2 156-159)	2.5.2.33. 纏 (Li-2 65.10-66.17, AY-2 109.8-111.16)	2.5.2.15. 纏 D 144b3, P 48a4-5.
3.4.2.31.1. 纏の総説 D 262a5-6, P 300b5-6.	2.5.2.33.1. 纏の総説 30.5-6; D 133b7-134a1, P 160a1-2.	
3.4.2.31.2. 昏沈 D 262a6-7, P 300b6. (M-1 161-163)	2.5.2.33.2. 昏沈 30.7-8; D 134a1, P 160a2-3.	昏沈ないし覆については、纏の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。
3.4.2.31.3. 睡眠 D 262a7, P 300b6-7. (M-1	2.5.2.33.3. 睡眠 30.9-12; D 134a1-2, P 160a3-	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
207-209)	4.	_____
3.4.2.31.4. 掉挙 D 262a7-b1, P 300b7-8. (M-1 164-165)	纏の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。	_____
3.4.2.31.5. 悪作 D 262b1-2, P 300b8-301a1. (M-1 204-206)	纏の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。	_____
3.4.2.31.6. 慳、嫉 D 262b2, P 301a1.	慳結、嫉結において定義が述べられたので、ここでは省略されるが、省略に関する言及なし。	_____
3.4.2.31.7. 無慚 D 262b2-3, P 301a1-2. (M-1 166-168)	2.5.2.33.4. 無慚 30.13-14; D 134a2-3, P 160a4-7.	_____
3.4.2.31.8. 無愧 D 262b3, P 301a2-3. (M-1 169-171)	2.5.2.33.5. 無愧 30.14; D 134a3, P 160a7.	_____
3.4.2.31.9. 忿 D 262b3-5, P 301a3-5. (M-1 172-174, Y ₂₀₁₉ 91)	2.5.2.33.6. 忿 30.15-16; D 134a3-4, P 160a7-8.	_____
3.4.2.31.10. 覆 D 262b5-6, P 301a5-6. (M-1 175-177)	2.5.2.33.7. 覆 30.17; D 134a4, P 160a8-b1.	_____
3.4.2.31.11. 纏の語義解釈 D 262b6-7, P 301a6-7.	2.5.2.33.8. 纏の語義解釈 30.18-19; D 134a4, P 160b1.	_____
3.4.2.31.12. 十纏と随眠の関係 D 262b7-263a1, P 301a7-8.	2.5.2.33.9. 十纏と随眠の関係 31.1-4; D 134a4-6, P 160b1-3.	_____
3.4.2.32. 漏 D 263a1-4, P 301a8-b5. (L 137.27-138.9, M-2 160-168)	2.5.2.34. 漏 30.6-12; D 134a6-b1, P 160b3-7. (Li-2 66.18-67.6, AY-2 111.17-112.7)	2.5.2.16. 漏 2.5.2.16.1. 漏の総説 D 144b4, P 48a5-6. 2.5.2.16.2. 欲漏 ²⁾ D 144b4-145a1, P 48a6-b3. 2.5.2.16.3. 有漏 ²⁾ D 145a1-4, P 48b3-7.

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
<p>3.4.2.33. 暴流 D 263a4-6, P 301b5-7. (L 138.9-16, M-2 169-174)</p>	<p>2.5.2.35. 暴流 31.14-16; D 134b1-2, P 160b7-161a1. (Li-2 67.7-11, AY-2 112.8-14)</p>	<p>2.5.2.16.4. 無明漏²⁾ D 145a4-5, P 48b7-49a1. 2.5.2.17. 暴流 2.5.2.17.1. 暴流の総説 D 145a5-6, P 49a1. 2.5.2.17.2. 欲暴流³⁾ D 145a6-b1, P 49a1-4. 2.5.2.17.3. 有暴流³⁾ D 145b1-3, P 49a4-7. 2.5.2.17.4. 見暴流³⁾ D 145b3-6, P 49a7-b4. 2.5.2.17.5. 無明暴流³⁾ D 145b6-7, P 49b4-5.</p>
<p>3.4.2.34. 軛 D 263a6, P 301b7. (L 138.17, M-2 175-179)</p>	<p>2.5.2.36. 軛 32.1-2; D 134b2-3, P 161a1-2 (Li-2 67.12-14, AY-2 112.15-113.1)</p>	<p>2.5.2.18. 軛 D 145b7-146a1, P 49b5-7.</p>
<p>3.4.2.35. 取 D 263a6-b4, P 301b7-302a5. (L 138.18-139.6, M-2 180-189)</p>	<p>2.5.2.37. 取 32.4-11; D 134b3-5, P 161a2-7. (Li-2 67.15-23, AY-2 113.2-13)</p>	<p>2.5.2.19. 取 D 146a1-4, P 49b7-50a2.</p>
<p>3.4.2.36. 漏、暴流、軛、取の語義解釈 D 263b4-6, P 302a5-8.</p>	<p>漏ないし取の定義の末尾を参照。</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.37. 繫 D 263b6-264a2, P 302a8-b3. (L 139.16-26, M-2 190-195)</p>	<p>2.5.2.38. 繫 32.13-15; D 134b5-7, P 161a7-b1. (Li-2 67.24-68.3, AY-2 113.14-114.1)</p>	<p>2.5.2.20. 繫 D 146a4-5, P 50a2-3.</p>
<p>3.4.2.38. 蓋 D 264a2-3, P 302b3-4. (L 139.27-31, M-2 196-202)</p> <p>_____</p>	<p>2.5.2.39. 蓋 (Li-2 68.4-18, AY-2 114.2-115.5, Y₂₀₁₄ 33-37) 2.5.2.39.1. 蓋の総説 32.17-33.1; D 134b7-135a1, P 161b1-2. 2.5.2.39.2. 睡眠と昏沈、掉</p> <p>_____</p>	<p>2.5.2.21. 蓋 D 146a5, P 50a3-4.</p> <p>_____</p>

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>拳と悪作を纏めて説く理 由 33.2-9; D 135a1-3, P 161 b2-7.</p> <p>2.5.2.39.3. 五つのみを蓋と する理由 33.9-13; D 135a3 -5, P 161b7-162a1.</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39. 智 (L 139.32-141. 25)</p>	<p>2.5.2.40. 智 33.15-16; D 135a5-6, P 162a1 -2. (Li-2 68.19-21, AY-2 115.6-10)</p>	<p>2.5.2.22. 智 D 146a5-7, P 50a4-6.</p>
<p>3.4.2.39.1. 智の総説 D 264a3-4, P 302b5-6.</p>	<p>法智ないし無生智について は、智の総説においてあげ られるが、具体的な定義な し。なお『牟尼意趣莊嚴』 では、十智のほかにも修智と 如説智が説かれ、合計で十 二智を数える。</p>	<p>法智ないし無生智について は、智の総説においてあげ られるが、具体的な定義な し。なお『有為無為決択』 では、十智のほかにも修智と 如説智が説かれ、合計で十 二智を数える。</p>
<p>3.4.2.39.2. 法智 D 264a4-6, P 302b6-8. (M-2 203-206)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.3. 類智 D 264a6-b1, P 302b8-303a3. (M-2 207-210)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.4. 他心智 D 264b1-3, P 303a3-5. (M-2 211-215)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.5. 世俗智 D 264b3, P 303a5. (M-2 216- 220)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.6. 苦智 D 264b3-4, P 303a5-7. (M-2 221-223)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.7. 集智 D 264b4-5, P 303a7-8. (M-2 224-226)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.8. 滅智 D 264b5-6, P 303a8-b1. (M- 2 227-229)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.9. 道智 D 264b6-7, P 303b1-2. (M-2 230-232)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>3.4.2.39.10. 尽智</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
D 264b7-265a1, P 303b2-3. (M-2 233-235)	_____	_____
3.4.2.39.11. 無生智 D 265a1-3, P 303b3-6. (M-2 236-239)	_____	_____
3.4.2.40. 忍 D 265a3-5, P 303b6-8. (L 141.26-142.3)	2.5.2.41. 忍 33.18-19; D 135a6, P 162a2-3. (Li-2 68.22-24, AY-2 115.11 -14)	2.5.2.23. 忍 D 146a7-146b1, P 50a6-7.
_____	_____	_____
_____	_____	2.5.2.24. 心相應行 (心所 法) の諸分類
_____	→ 「2.5.4. 相應行中の所修 と所断」	2.5.2.24.1. 所断と所修 D 146b1-5, P 50a7-b5.
_____	_____	2.5.2.24.2. 大地法などの分 類 D 146b5-147a4, P 50b5- 51a5.
_____	_____	2.5.2.24.3. 様々な種類の心 に俱生する心所法の数
_____	_____	2.5.2.24.3.1. 心の分類 D 147a4-b3, P 51a6-b6
_____	_____	2.5.2.24.3.2. 欲界繫の善心 などと相應する法 D 147 b3-148a7, P 51b6-52b5
_____	_____	2.5.2.24.3.3. 色界繫ならび に無色界繫の善心などと 相應する法 D 148a7-b3, P 52b5-53a1.
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
_____	_____	_____
3.4.3. 心不相応行	2.5.3. 心不相応行	2.5.3. 心不相応行
→ 「3.4.1.3. 心不相応行の 総説」	2.5.3.1. 心不相応行の総説 34.2-5; D 135a6-b1, P 162a3- 6. (Li-2 69.1-4, AY-2 115.16 -116.2)	2.5.3.1. 心不相応行の総説 D 148b3-5, P 53a1-3.
3.4.3.1. 得、非得	2.5.3.2. 得、非得	得ないし和合 (縁和合) に ついては、心不相応行の総 説においてあげられるが、
D 265a5-b1, P 303b8-304a4. (L 142.4-19, M-1 232-238)	34.7-11; D 135b1-3, P 162a6- 8. (Li-2 69.5-10. AY-2 116.3	_____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
3.4.3.2. 無想定 D 265b1-2, P 304a4-5. (L 142.20-23, M-1 246-249)	-11) 2.5.3.3. 無想定 34.13-14; D 135b3, P 162a8-b2. (Li-2 69.11-13, AY-2 116.12-16)	具体的な定義なし。 _____ _____ _____ _____
3.4.3.3. 減尽定 D 265b2-3, P 304a5-6. (L 142.24-27, M-1 250-253)	2.5.3.4. 減尽定 34.15-17; D 135b3-4, P 162b2-3. (Li-2 69.14-15, AY-2 116.18-117.1)	_____ _____ _____ _____
3.4.3.4. 無想 D 265b3, P 304a6-7. (L 142.28-30, M-1 242-245)	2.5.3.5. 無想 34.17-35.1; D 135b4-5, P 162b3-4. (Li-2 69.16-17, AY-2 117.2-6)	_____ _____ _____ _____
3.4.3.5. 命根 D 265b3-4, P 304a7. (L 143.1, M-1 254-256)	2.5.3.6. 命根 35.3; D 135b5, P 162b4-5. (Li-2 69.18-19, AY-2 117.7-8)	_____ _____ _____ _____
3.4.3.6. 同分 D 265b4, P 304a7-8. (L 143.2-4, M-1 239-241)	2.5.3.7. 同分 35.3-4; D 135b5-6, P 162b5. (Li-2 69.20-22, AY-2 117.9-11)	_____ _____ _____ _____
3.4.3.7. 依得、事得、処得 D 265b4-5, P 304a8-b1. (L 143.5-8, Y 2017a, M-2 240-245)	心不相応行の総説においてあげられるが、具体的な定義なし。 _____	_____ _____ _____ _____
3.4.3.8. 四相 D 265b5-6, P 304b1-2. (L 143.9-14, M-1 257-268)	2.5.3.8. 四相 35.4-6; D 135b6, P 162b5-7. (Li-2 69.24-70.1, AY-2 117.12-16)	_____ _____ _____ _____
3.4.3.9. 名身、句身、文身 D 265b6-7, P 304b2-3. (L 143.15-19, M-1 269-280)	2.5.3.9. 名身、句身、文身 35.8-9; D 135b6-7, P 162b7-8. (Li-2 70.2-4, AY-2 117.17-20)	_____ _____ _____ _____
3.4.3.10. 縁不和合、縁和合	2.5.3.10. 不和合、和合 35.11; D 135b7, P 162b8. (Li-	_____ _____

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
<p>(Y_{2016a} 166-167)</p> <p>3.5.3. 六識 D 266a4-7, P 304b8-305a4.</p> <p>→ 「3.1.3.1.1. 眼根」</p> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <p>→ 「5. 十八界」</p> <p>4. 十二処 (L 144.24-145.8)</p> <p>4.1. 十二処の総説 D 266a7-b1, P 305a4-5.</p> <p>4.2. 意処 D 266b1, P 305a5-6.</p> <p>4.3. 法処</p> <p>4.3.1. 法処の総説 D 266b2-3, P 305a6-7. (Y_{2016c} 82-83)</p> <p>4.3.2. 無為法</p> <p>4.3.2.1. 虚空 D 266b3, P 305a7-8. (Y_{2016c} 82-83, M-1 281-283)</p> <p>4.3.2.2. 非択滅 D 266b3-4, P 305a8. (Y_{2016c} 82-83, M-1 288-290)</p> <p>4.3.2.3. 択滅 D 266b4, P 305a8-b1. (Y_{2016c} 82-83, M-1 284-287)</p> <p>→ 「4.3.2.2. 非択滅」</p>	<p>163b6-8.</p> <p>2.6.3. 六識 37.11; D 136b3-4, P 163b8-164a1.</p> <p>2.6.4. 識が根の名前で呼ばれる理由 37.12-17; D 136b4-5, P 164a1-4.</p> <p>2.7. 蘊の語義、五蘊の結び</p> <p>37.19-38.6; D 136b5-7, P 164a4-7. (Li-2 72.13-17, AY-2)</p> <p>→ 「4.1. 十八界の総説」</p> <p>3. 十二処 (Li-2 72.18-74.8, AY-2 122.15-125.11)</p> <p>3.1. 十二処の総説 38.9-10; D 136b7, P 164a7-8.</p> <p>3.2. 意処 38.12-16; D 136b7-137a2, P 164a8-b3.</p> <p>3.3. 法処</p> <p>3.3.1. 法処の総説 38.18-20; D 137a2-3, P 164b3-5.</p> <p>3.3.2. 無為法</p> <p>3.3.2.1. 虚空 38.21-39.2; D 137a3-4, P 164b5-6.</p> <p>→ 「3.3.2.3. 非択滅」</p> <p>3.3.2.2. 択滅 39.3-4; D 137a4-5, P 164b6-8.</p> <p>3.3.2.3. 非択滅</p>	<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <p>3. 十八界 D 149a1-3, P 53a8-b3.</p> <p>4. 十二処</p> <p>4.1. 十二処の総説 D 149a3-4, P 53b3-4.</p> <p>4.2. 意処 D 149a4-5, P 53b4-5.</p> <p>4.3. 法処 D 149a5, P 53b5-7.</p> <p>虚空、択滅、非択滅の三無為については、法処の要素としてあげられるが、具体的な定義なし。</p> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>39.5-7; D 137a5-6, P 164b8-165a1.</p> <p>3.3.3. 無為の实在性に関する議論 39.8-13; D 137a6-b1, P 165a1-5.</p> <p>3.4. 処の語義 39.14; D 137b1, P 165a5.</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>5. 十八界 D 266b4-5, P 305b1-2. (L 145.9-12)</p>	<p>4. 十八界 (Li-2 74.9-13, AY -2 125.13-20)</p> <p>4.1. 十八界の総説 39.16-18; D 137b1-2, P 165a5-7.</p>	<p>4.4. 十二処と五蘊の關係 D 149a5-6, P 53b7-8.</p> <p>4.5. 十二処と十八界の關係 D 149a6-7, P 53b8-54a1. → 「3. 十八界」</p>
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>4.2. 界の語義 39.19; D 137b2-3, P 165a7-8.</p> <p>5. 十八界にもとづく分類的な解説 (諸門分別) (Li-2 74.14-75.5, AY-2 125.21-127.5)</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>5.1. 欲界繫、色界繫、無色界繫、不繫 40.1-4; D 137b3-4, P 165a8-b3.</p>	<p>5. 十八界にもとづく分類的な解説 (諸門分別)</p> <p>5.1. 欲界繫、色界繫、無色界繫、不繫 D 149a7-b2, P 54a1-4.</p>
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>5.2. 善、不善、無記 40.5-8; D 137b4-6, P 165b3-6.</p>	<p>5.2. 善、不善、無記 D 149b2-4, P 54a4-7.</p>
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>5.3. 内、外 40.9-10; D 137b6-7, P 165b6-7.</p>	<p>5.3. 内、外 D 149b4-6, P 54a7-b1.</p>
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>5.4. 有所縁、無所縁 40.10-11; D 137b7, P 165b7.</p>	<p>5.4. 有所縁、無所縁 D 149b6, P 54b1-2.</p>
<p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p>	<p>5.5. 四諦 D 149b6-150a1, P 54b2-4.</p>

『中観五蘊論』	『牟尼意趣莊嚴』	『有為無為決択』
<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>	<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>	5.6. 三性 D 150a1-2, P 54b4-5. 5.7. 二諦 D 150a2-3, P 54b5-6. 6. 六界 D 150a3-4, P 54b6-7. 7. 有色無色、有為無為 D 150a4-6, P 54b7-55a3. 8. 三界と蘊の関係 D 150a6-7, P 55a3-5. 9. 九章の結び D 150a7-b1, P 55a5-6.
6. 結語と結偈 D 266b5-6, P 305b2-3. (L 145.13-17, Y 2015b 91)	6. 一切法解説の結び 40.13-14; D 137b7-138a1, P 165 b 8. (Li-2 75.6-8, AY-2 127.6-9)	

1) 『中観五蘊論』では、軽安と不軽安の解説は合わせて行われるため、ここでは軽安と不軽安を一つの項目として扱う。

2) 『中観五蘊論』ならびに『牟尼意趣莊嚴』における解説と比較すると、『有為無為決択』は三つの漏それぞれの構成要素を五部との関係を含めて詳しく説くので、三つの漏を個別の項目として立てる。

3) 『中観五蘊論』ならびに『牟尼意趣莊嚴』における解説と比較すると、『有為無為決択』は四つの暴流それぞれの構成要素を五部との関係を含めて詳しく説くので、四つの暴流を個別の項目として立てる。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号：18J02114）による研究成果の一部である。

Summary

The Lineage of Texts Transmitting the Sarvāstivāda System of Elements to the Last Historical Stage of Indian Buddhism: An Elucidation through a Detailed Comparison of Textual Contents.

YOKOYAMA Takeshi

An intellectual basis for the establishment and development of Mahāyāna Buddhism was offered by the concepts posited by the Sarvāstivādas, one of the most influential sects of Indian Buddhism. Mahāyāna Buddhists regarded the system of the elements (*dharmas*), which was the principle theory of the Sarvāstivādas, as preliminary knowledge that Buddhist beginners must learn before entering the Mahāyāna thought. The *dharmas* were transmitted successively through the generations to the last historical stage of Indian Buddhism that occurred in the 11th and 12th centuries.

In a previous paper, the author clarified one of the textual lineages that had transmitted the Sarvāstivāda system of the elements to this last historical stage of Indian Buddhism: *Abhidharmāvatāra* (AA) of *Skandhila (ca. 5c) → the *Madhyamakapañcaskandhaka* (MPSk) of Candrakīrti (ca. 7c) → the *Munimatālamkāra* (MMA) of Abhayākaragupta (ca. 11-12c) → the *Samśkr̥tāsamskr̥taviniścaya* (SAV) of Daśabalaśrimitra (ca. 12c). A comparison of the contents of these texts is required for the investigation of this lineage alongside the comparison of their enumeration of the *dharmas*. Hence, the author compared the entire contents of these two texts to elucidate the details of the conveyance of information from the AA to the MPSk. This paper investigates the details of the transmission process after

the MPSk by comparing the contents of the MPSk, MMA, and SAV.

This study elucidates that the *dharmas* were essentially simplified through the historical process of transmission. For example, the definitions of certain elements were eliminated or some additional arguments concerning elements were omitted. However, it is noteworthy that after the MPSk, the general tendency of simplification encompassed the gradual supplementation of taxonomic explanation such as several classifications grounded on 18 *dhātus*.

JSPS Research Fellow